

平和と開発にかかるカンボジアの見解

カンボジアは、かつて 1970 年から 1975 年の内戦と、1975 年から 1979 年までの人類史上もつとも悲劇的な出来事を経験した後、交戦地帯、殺戮の場所として知られていました。1979 年 1 月、この悲劇的状况から解放された後、ゼロからのスタートとなりましたが、我が国は様々な分野で多大な困難に直面しました。カンボジア人が、平和を愛するすべての人々の共通の欲求である、本当の、そして完全なる平和と安定を知らなかったのは言うまでもありません。カンボジア王国のサムデック・アッカ・モハ・セナ・パディ・テコ・フン・セン首相のウィンウィンの政策のおかげで、カンボジア人が長い間待ち望んでいた、平和で安定した、そして社会的発展という夢が現実のものとなりました。

こういった苦勞してつかんだ平和と安定は、カンボジアが不安定で食料不足に陥っていた状況から、食糧を輸出し直近 20 年間で経済成長率が年約 7% となり、また人気の観光地となるなど、貧困脱却の点で目覚ましい活躍をする国へと成長するうえで、絶好の機会となりました。これらの成果により、カンボジアは 2016 年に正式に「低位中所得国」の称号を手にししました。さらに印象的なこととして、我が国の経済成長率は、2018 年に 7.5% となるなど期待以上の成果となりました。さらに、政府は 2030 年に「上位中所得国」へ 2050 年に「高所得国」へと発展を遂げることを目標とした長期ビジョンを策定しました。過去の経験から、完全な平和、政治とマクロ経済の安定が、経済社会発展の主要な要因であることを認めざるを得ないと考えます。こうしたことから、わが政府は何としてでも平和を守ろうと取り組んできています。

国連の責任ある一員として、そして以前国連平和維持軍を受け入れてきた国として、カンボジアは国連平和維持軍に最も活発に貢献した国の一つになっていると自負しています。我々は 2006 年から、6,300 人の国連平和維持軍を中央アフリカ共和国、スーダン、南スーダン、チャド、レバノン、セルビア、シリアとマリの 8 か国に派遣してきました。今年、カンボジアは 122 派遣国のうち 29 番目、ASEAN 諸国の中では 3 番目に派遣者数の多い国となりました。カンボジアは、現在、2018-2019 国連総会副議長、2019 年国連経済社会理事会のメンバー、2020 年開催の第 13 回アジア・ヨーロッパ会議主催国として、国際社会における平和維持活動のプロセスにより一層貢献できる可能性があります。

地域と国際平和に多大な貢献を行う国として、カンボジアは、戦争は解決策ではないことを念頭に、対話の文化と平和的解決という原則を掲げ、取り組みを進めています。核兵器、化学兵器、生物兵器を製造、使用、貯蔵することは、絶対に禁止されるべきです。悲惨な経験をした私として、日本が原爆で大変な被害に苦しんできたことに共感しています。カンボジアは、核不拡散禁止条約 (NPT) の締約国となっており、NPT においては非核兵器国 (NNWS) として認知されております。さらに、包括的核実験禁止条約にも署名・批准し、東南アジア非核地帯 (SNWFZ)

条約にも署名しました。2013年10月、カンボジアは国連第一委員会での「核兵器の人道上の結末に関する共同声明」に署名した125か国のうちの1つであり、そこでは、我々は核兵器がもたらす人道上の破壊的な結末について深い憂慮を表明し、核兵器が将来2度と使用されないことを保証するためのたった一つの方策は、核兵器の全廃であると提起しました。

戦争や破壊、苦悩を体験した私自身にとって、我が国に完全な平和が訪れたことを心から感謝しています。それと同時に、紛争地域にも青い空と輝く太陽に覆われることを希望します。私は、世界平和を心から祈念するとともに、地球上の人類がともに平和で仲良く暮らせることを願っています。対話の文化や忍耐力を育成し、信頼と自信を育むことが世界平和を確かなものとするのです。一緒に戦争と核兵器のない世界の実現のため努力していきましょう。